

福井モデルプロジェクト（1）

ESDにおける幼児教育・保育の提案

都市部の保育園が実践した3年間の自然との関わり

ノーム自然環境教育事務所

はじめに

社会全体として、身近な自然との関わりが希薄になってから、そのような暮らしが人の心身の発達に良好な影響を与えることは少ないのではないかと考えて、幼稚園・保育園児の自然とのコミュニケーションを積極的に進めてかれこれ10年が経とうとしています。

自然とのコミュニケーションと環境教育は特別に関係の深い間柄です。いわゆる「in、about、for」という環境教育の流れからすると、環境教育の根幹を培う「in」は入口にあたり幼・保育園児が対象となります。入口を広げて多くの子どもたちの土台作りに関わりたいという願いから、いろんな環境NPOや団体に声を掛けさせていただき、約4年前より「エコプランふくい」さんの協力を得て、四季を通した保育園児の自然体験活動を開始することができました。

今回は、改めてその実施結果をこのような形で報告できることに感謝しています。毎回のように行われる子どもたちの気づき中心の活動、子どもたちの成長はもちろんのこと、担当された保育士さんの自然の中での関わる技術や価値観の変化、保護者の変化も含めて見直すいい機会になりました。

私たち自身にとっては、ルーティンで進めてしまいがちになっていることもあり、子どもたちや保育士さん、お手伝いくださる保護者の方の姿勢には新しい発見がありました。「今ここ」という時間や関わりは二度と来ないことを改めて実感した次第です。

今年も継続して事業を進めています。この事業をきっかけに、多くの子どもたちや保護者が、自然との関わり大切さを認識していることを伺い「in」から「about」そして「for」へと発展していくことを願っています。

2013年2月

ノーム自然環境教育事務所

代表 坂本 均

自然体験活動が園児／保育士／保護者へ与える影響について ～3年間の生き物みっけの足跡とこれから～

目次

はじめに	65
目次	
I 実施にあたって	67
1 活動の目標	67
2 身近な自然とのコミュニケーションの大切さ	67
3 活動の進め方	68
4 主な実施フィールドの紹介	69
II 活動報告	70
① 春の雑木林・初夏の田んぼ&保育士ふりかえり	70
② 夏の川遊び&保育士ふりかえり	77
③ 秋の雑木林と稲刈り後の田んぼ&保育士ふりかえり	82
④ 冬の雑木林&保育士ふりかえり	89
III 全体をふりかえって気づいたこと(担当保育士より) ..	93
IV 子どもたちが「ふりかえり」で描いた絵	94
V いきものみっけ活動保護者アンケート	97
VI まとめ	105

I 実施にあたって

1 活動の目標

社会的な流れとして、主に安全重視の保育の流れの中で、森や河川に出かけることの少なくなった保育園や特に都市部の保育園においてはモザイク的な自然環境にとぼしい現状である。そこで「いきものみつけ」という身近な生き物のテーマで、多様な自然とコミュニケーションをとり頭の中だけではない生命のつながりを肌で得ることを大きな目標としました。

本来、幼児教育・保育は「自然との関わり」をととても大切な要素として位置付けていました。ここ20年の間に社会構造や価値観の変遷とともに、「安全・安心第一」「危険から遠ざける」を合言葉に幼児教育・保育の現場においてその関わりがダイナミックさを失ってきたように思います。一方でそのような状況に危機感を感じ取っている教育者やお母さん方によるいわゆる「森の幼稚園」運動が徐々に広がってきました。

全ての保育園・幼稚園がそのように進めることは不可能ですが、周囲の身近な自然に出かけていくことは可能です(福井にはまだまだそのような場所が残っています)。特に、都市部の子ども達にとっては、整備された公園での活動がその代行地として利用されている現実があることを踏まえて、四季折々の自然の変化の中での体験活動は、回数の多さに限らず園児の心身へ多大なプラスの影響を提供できるのではないかと考えました。

2 身近な自然とのコミュニケーションの大切さ

子どもたちが、身近な里山で、どんな生き物が、どんなものを食べて、どんな生活をしているのかを、四季を通じて五感で感じる。そして、身近なところにいる小さな生き物(昆虫、植物、鳥など)とのコミュニケーションを通して、家族との交流につながることを願っています。

今までは子どもたちの遊び場所として安全を考えた結果、樹木や生き物の少ない公園での遊び中心から、少し距離を延ばすだけで、まだまだ豊富な自然環境が残っている周囲の身近な自然に家族で出かけていく機会を増やしてほしいのです。

また、自然との関わりを通して、子ども達が生き物に触れ生命を理解し、四季(植物・昆虫等の変化)を心身で受け止め、人間が地球環境のなかで生きていることを実感する価値観を育てていきたい。そのことが将来的に地球全体としての持続可能性を考えるための「種まき」になると信じています。

この活動をひとつの幼稚園と連携して行うことによって、先生にも季節と生き物のつながりを実感してもらい、幼児教育の一環として、他の保育園や幼稚園への自然との関わりモデル的な取り組みにもなればと思います。

3 活動の進め方

四季の変化が感じ取れる身近な里地里山の選定と日程調整
※前年度末に実施園とフィールドや進め方、時間配分などを調整。関係者ととも使用フィールドを見学し安全配慮等について調整する時間を持つ。



当日は貸し切りバスでフィールドへ移動。
活動時間は、午前10時～午後2時



基本的な活動の流れ
散歩～(生き物探し～採集～逃がす～遊ぶ)～昼食～ふりかえり(生き物を描く)～終了
※荒天は順延



毎回、保育園職員の「ふりかえり」と年2回の保護者アンケートの実施
※保育士さんふりかえり内容①感想 ②気になった子どもの声
③通常保育に活かせること ④全体の感想や意見等



次回に向けての時期や場所の選定。また、活動の流れなども再度調整する。

4 主な実施フィールドの紹介



■春・初夏のフィールド「田んぼ」 in 大野市六呂師地区

標高500m、周囲を杉林・放牧場・キャンプ場に囲まれた水田。畔が結構広くて子どもたちが歩くのに危険の少ない道。横を小川が流れていて魚の探索もできる。



■夏のフィールド「打波川」 in 大野市下打波地区

標高350m、周囲を落葉広葉樹に囲まれた小さな集落を流れる清流。清流の希少生物であるカジカガエルや県絶滅危惧種のアジメドジョウ、希少種のヒダサンショウウオが生息する。

水温約16度から20度。浅瀬、淵、急流や緩やかな流れと変化に富んだ場所。遊んだ後は大きな岩の上やドラム缶風呂で身体を温めることができる。



■秋・冬のフィールド「ハックルベリーの森」 in 大野市六呂師地区

標高500m、周囲を杉林・放牧場・沢に囲まれた約2ヘクタールの平坦な落葉広葉樹。約40年の森。樹登りや山芋掘りやツル登りや大きな岩(火山岩)もあり変化に富んでいる。キツネ、タヌキ、ウサギ、リス、テン、アオゲラやコゲラ、ナナフシモドキや多様なキノコ類、クロモジ・・・普通の日本の雑木林。



■秋のフィールド「都市部郊外の田んぼ」 in 福井市原目地区

都市郊外の原目地区。圃場整備された水田地帯の一角。横を流れる用水も数カ所しかないが、ドジョウやドンコ類が生息している。



■秋・冬のフィールド「でかでか山」 in 福井市岡保地区

岡保保育園のPTA&保育士さんと一緒に当団体が整備を進めている保育園の演習林。約1haの混交林。平坦な場所もあれば斜面もあり、中を小さなせせらぎが流れていて、水遊びも可能。

II 活動報告 ①春の雑木林・初夏の田んぼ&保育士ふりかえり

活動名	春の雑木林	
ねらい	①子どもたちの遊びを「待つ」 ②心身を使って思いっきり遊ぶ	
実施日時	22年3月末福井市内	9:00～14:00
活動場所	岡保地区雑木林	
参加者	(年中) 14名, (年長) 12名	
指導者	坂本 均	

(活動実施プログラム)

○雑木林を散策

- ・フキノトウを発見し、臭いや花弁をちぎって枚数を数えたり食べてみたりした。
- ・竹の根っこを見つけ、無数の根っこを目を近づけて観察。五感を使う。
- ・木の実や草花を見つけ、興味を持って散策した。

○雑木林で遊ぶ

- 木に登って、ジャンプ／崖をよじ登る／倒木の上でブランコ。
- つるにつかまって、ターザンごっこ／小川に入って、笹舟を作ったり、探険。
- 大きな倒木の上を歩く

○ふりかえり

- ・目を閉じて、太陽、風、匂いなどを感じてみた。
- ・活動の始まりと終わりには、森の神様に、遊ばせてもらえることへの感謝をする。

○絵を描く

- ・今日の楽しかった思い出を絵に描いた。



ぶら下がる



倒木に乗って遊ぶ



【活動評価】

いつもと異なる森での活動。場所も違えば遊びも変わる？ハックルベリーの森で十分楽しんでいる子どもたちはどこに行っても自分たちで遊びを探して遊び始めるようになっていた。保育士さんと相談して、子どもたちの遊びを見守るだけでよい！ということを進めた。ターザンのようにできるツルもあるが、あえて「こんなのあるよ！」と言わずに、誰が見つけて遊び始めるか？今回は、子どもたちの本能を信じて「待つ」ことに専念した。最後の方で見つけた子どもから遊びが伝染してターザンごっこは始まった。また、写真でもわかるように、丸太の上に乗ってお尻で進んで飛び降りたり、揺らしたり……思いっきり身体を使って遊べない子どもたちも、水が流れてくるのを上に上にと歩いて「どこからきているのか？」と源流を探したりしたことも印象に残っている。

活動名	田んぼの生きものたち(初夏編)
ねらい	①活動の流れに慣れる ②スタッフとのコミュニケーション③生き物に触れる
実施日時	平成22年5月末 9:00～15:00
活動場所	大野市南六呂師の田んぼ
参加者	(年中) 15名, (年長) 13名
指導者	坂本 均

(活動実施プログラム)

○田んぼで春の生きものを見つける(年中)

・田んぼの水路でオタマジャクシや大きなトノサマガエル、お腹の赤いイモリも見つけ、みんなで観察した。

○広場で虫を捕まえる(年長)

・芝生では、モンシロチョウ、バッタなどを捕まえて、観察した。

○田んぼで生きものを見つける(年長)

・年中と交代して、水路で生きものを見つけた。

○今日の感動を絵に描く

・今日、見つけた生き物や景色などを、丁寧に描いた。



(活動評価)

今まで見たことのないような広い大空と田んぼに、子どもたちはとてもびっくりしていた。たくさんのオタマジャクシを積極的に触ろうとする子どもたちは少なかったが、「チョコつとでもいいので触ってみようか?」という声かけに少しずつ触ることのできた子どもたちが増えてきた。年長と年中の子どもたちとの動きが大きいようみえた。田んぼの横を流れる小川にも生き物があるとわかると、我先にと入って網をすくうのは年長児童。ドンコのようないきものを捕まえるうちに、泥んこだらけになってしまったのが印象に残っている。



小さな子どもたちの「ふりかえり」として、自分たちの発見した印象に残っている生き物を画用紙に描いてもらった。オタマジャクシを描く子どもが多かった。いつの時代もオタマジャクシは子どもたちの人気者だということを再認識した。

活動名	梅雨の山のいきものみつけ	
ねらい	① 春の雑木林を体感する ②生き物に触れる ③自然に興味を持つ	
実施日時	平成23年 6月中旬	9:30~12:00
活動場所	足羽山	
参加者	(年中) 8名、	(年長) 16名
指導者	坂本 均	

(活動実施プログラム)

○アイスブレイク

- ・風を体で感じて、表現してみた。

○足羽山を歩きながら、いきものみつけをスタート

- ・池には、モリアオガエルの卵があり、触って観察してみた。
- ・ TENTウ虫、ダンゴ虫、ミミズ、ヤスデ、毛虫等を見つけて、大喜び。
- ・アリの行列を発見したり、シャクトリムシの動きを観察した。

○ブナの道を探検する

- ・1列になり、雑木林の中へ入って行った。
- ・木の音を聴いてみたり、蟻地獄を観察。
- ・白いシーツを広げ、木を揺すってみて、落ちてきた虫などを観察。
- ・見つけた昆虫などは、虫かごに入れた。
- ・何かを見つけると、他の友達や先生に知らせ、感動を共有した。

○顕微鏡で観察

- ・見つけた昆虫や、植物を1人ずつ顕微鏡で観察した。
- ・ミクロの世界に、感動しながら、いろいろなものを観察。

○虫を森に帰した

○ふりかえり

- ・今日の活動を振り返り、お互いの取組を認めた。
- ・次回は、川でいきものみつけすることを知らせ、興味を持たせた。

○絵を描く

- ・園に帰り、落ち着いた雰囲気の中で、今日の感動を絵に表現した。



(活動評価)

今年度初めての「いきものみつけ」のため、年中児の中には、いきものに触れることに抵抗のある子もいたが、段々慣れてきて、最後はもっと活動が続けたがっていた姿が多く見られた。今回は、街中の里山をフィールドとした。池の側で不思議なものを発見する時間を持った。モリアオガエルの卵塊を発見したり触れてもらったり、ツブツブの黄色い卵を眺めたりした。途中の階段では、オトシブミを発見。広げてみたりと興味が広がったように思う。

保育士さんの「田んぼの生き物初夏編／ふりかえり」

■感想■

- 田んぼの水路でオタマジャクシを探している時、全員が夢中になって網を使って探していたのが印象的だった。
- 生きものを目でみて、実際に網で捕まえて、触っての感動。沢山の感動があった。
- 普段、だんご虫、ミミズ程度しか身近にないため、子ども達は本当に貴重な体験だった。
- 遊んだ田んぼの側だったので、楽しみな気持ちで食べられていたように思った。
- 自然の中でとても気持ち良く食事が出来、特に美味しく感じた。また子ども達が捕まえた生き物を眺めながら、友達と生きものについての会話を楽しんで食事をしていた。
- 自分で捕まえたいきものを観察して描いている子もいたが、イメージで描いている子もいた。
- 感動をすぐその場で絵に描くというのは、とても良いと思った。子ども達は一番印象に残ったものを描き、そのものの形やその場の状況をよく見たり、思い出すということも良いと思った。
- 「描こう」という意識を持って取り組めた子は、経験が生きた。生き生きとした絵が描けたのではないかと思う。

■気になった子どもの声■

- 生きものが捕まらなかった時や捕獲した生きものを飼育ケースに移す時、保育者に頼ることが多い。
- 「水着を持ってくればよかったね」という声があり、抵抗感がないというより、自然そのものの中での遊びの経験のなさを感じた。
- ひとつのものをじっくり描く様子が少ないのが、気になった。
- 「ここがこうなって・・・」など、思い出しながら描いていて、このような場を設けることでその場限りにならないので良いと思った。

■今後の保育の参考になったこと■

- 4才児は初めての外でのお弁当だったため、身の回りの始末に手間取った。生活面が自立出来て初めて、遊びも生き生きと自己発揮出来ると思うので、自分のものは自分で管理、始末できるよう、援助していきたい。
- 今まで戸外で写生をする機会が少なかったので、もっと取り入れていかなければいけない。
- モノを良く見る(観察する)ということをしていきたい。

■全体の感想や意見等■

- 素敵な自然体験、本当にありがとうございました。初めてのため、気持ちが先へ先への5才児、また周囲に圧倒されポーズの4才児と両極端の姿が印象的だった。保育の課題も見えてきた。
- 大人も夢中になり楽しかったので、子どもは、もっとワクワクして参加していたと思う。次回は楽しみ。
- 人工物の中で育っている子ども達。公共のマナーに気付かせる機会は多くありますが、自然の中でも守るべき約束ごとが沢山あると思う。自然を守るためにも身を守るためにも、この機会にその場に応じて、教えていただけますようお願いいたします。
- 今回は虫を顕微鏡で見る体験をできたことが、とても良かった。

- これからはもっと細かいところまで見たり、気付ける言葉掛けをしていきたいと思った。
- ヤスデなのかムカデなのかしっかりした知識が必要だと感じると同時に、講師の方がいてくださってこそ出掛けられると感謝している。
- シジウカラなどのさえずりを間近に聞きながら、とても心が休まるひと時でもあった。
- 園に帰ると、春の図鑑でアリジゴクや TENTUMシを見つけて嬉しそうに見せてきてくれた。
- 今日初めて目にしたいいきものがたくさんいたので、嬉しさから「図鑑にも載っているかな？見てみよう！」という気持ちになったのではないかと感じる。
- 実際に見たり体験することで、さらにいきものや自然に興味や関心を持つのだろうと思うため、直に自然に触れることの素晴らしさを改めて感じた。
- いろいろな場所、いろいろな季節のいきもの探しを経験する中で、いきものと棲み分け、共存していくことを認められるような大人に育ってくれたらと願う

保育士さんの「春の雑木林編／ふりかえり」

■感想■

- 子供達が積極的に自然に関わっている姿が印象的。一人一人興味があるところで、じっくりと遊べて良かった。
- 森に入っていくことに全く抵抗なく、ワクワクした表情で入っていった。「森の中は楽しいことがいっぱい」ということを、よくわかってきたのだと思う。子ども一人一人が自分で何かを見つけ、自分で満足いくまで試したり、挑戦してみたり出来たととても良いと思った。
- 山の神に感謝したり、草木を観察したり、五感を通して感じる事が幼児期にはとても重要だと思う。自然の恵みに感謝する。

■遊んでいるときの子ども声■

- 木に登り、木から飛び降りたかったH君。怖がりながら「○○君みたいに飛ぶたいよ～」 「だから頑張る」とつぶやきながら、勇気を出していた。友達からの刺激が大きく、一人で乗り越えたH君、頑張ろうという心が育ってきているなと感じた。
- 「想像してた通りの森だ」「この水、どこから流れてくるんやろ？」「よし！つかまれ！レスキュー隊だ」「もう少しがんばれ！」と励まし、登り一緒にガッツポーズをしていた。
- 「水はどこから？」「雪が解けたから流れてきた」「水の音、風の音」「カエルが起きてきた」「日本の国ではないみたい」
- 「ふきのとう、食べてごらん」の声に、「にが～い！春の味」という言葉が可愛い。
- 同じ場面の絵を描いている子を見て、「あー一緒や」「○○ちゃんも楽しかったんか？一緒やね」と喜んでた。
- ターザンの絵を描いた子など、「ここで“あーあー”って、こうやって動いたの！」など、自分の体験した場面を描いて話してくれた

■今後の保育の参考になったこと■

- 遊具などなくても、夢中で全身を動かして遊べる自然の環境が素晴らしい！整備し、維持していくのは本当に大変なことと思うが、環境づくりがあってこそその自由な遊びを楽しめる場だと思う。

- 機会があれば、再度体験させたい。生の直接体験が大切で、子どもが主体的に経験していくことが大切だと思う。
- 街の中では、ふきのとうを見つけることも出来ないので、良い経験をすることが出来た。
- 描きだす前に、思い返せるように、どんなことをして遊んだか、どんなものを見つけたか、伝えてから描きだすといいなと思った。
- 今回は、生き物が多くいなかったからか、楽しかった遊びの絵が多かったように思う。
- ターザンロープの場所など、保育者から声をかけなくても、保育の中で、願いや思いを持っていることが大切なのだと感じた。

■全体の感想や意見等■

- 子どもたちが全身を使って、汚れも気にせず遊ぶことはいいなと思った。
- 自然の中で、子供達が考えて遊び出せる姿が、すごく嬉しく、成長を感じた。今後も、そのような子供達の姿を大切にしていける保育を心がけたい。
- 本当にノビノビと自分のやりたい遊びを楽しむことが出来ていて、帰りのバスではすっかり静か・・・大満足だった様子。
- 起伏のある山の中を歩くことは本当に全身運動であると改めて思った。

保育士さんの「梅雨の山のいきものみつけ編／ふりかえり」

■感想■

- 感動をすぐその場で絵に描くというのは、とても良いと思った。子ども達は一番印象に残ったものを描き、そのものの形やその場の状況をよく見たり、思い出すということも良いと思った。
- 「描こう」という意識を持って取り組めた子は、経験が生きた。生き生きとした絵が描けたのではないかと思う。
- 普段、絶対に通らない道を通り、目をキラキラさせて歩いている子もいれば、ドキドキして不安そうに歩く子もいた。
- 友達や保育士がいきものを見つけ興奮していると、下を向いて歩いていた子が興味を示し、身をのりだしていた。
- どんな所に虫がいるか「もう知っている！」といった様子で、どの子も生き生きといきものを探していて、嬉しく感じた。
- 林の中では蚊も多く、やや不安そうな女児もいたが「ちょっと怖い・・・」と感じながらも、また楽しみを見つけていた。
- 夏鳥の音が心地よく、よいひと時であった。
- 講師の方がいてくれることで、たくさんの方に気づき、新しいことを知ることができるため、子供たちと同じようにワクワクした気持ちで楽しめた。
- 水場にはいきものが集まるのだなと改めて感じると同時に、こんなに近くでいきもの探しができることに驚き、嬉しかった。
- 卵からかえったばかりの卵付きのオタマジャクシを見れたことは貴重だったと思う。
- モリアオガエルはもっと山の高いところにいると思っていた。
- 普段なら通り過ぎてしまう場所でも「何かいるかな」という気持ちでゆったりと見ていくと、こんなにもたくさんのいきものがあるのだと気付かされた。

■遊んでいるときの子ども声■

- 鳥の鳴き声が聞こえると「おいでって言ってるみたい」「お母さんのこと呼んでるんじゃない？」など子どもらしいかわいい言葉が聞かれた。
- 5歳児は「おーい！ちょっと〇〇いたぞ！」ととにかく友達と伝え合い、友達と一緒に感動していた。
- 4歳児は「オレが先！」という風だったが、1年で“仲間”という意識が育っていくのだと改めて違いに気付いた。
- 顕微鏡でダンゴ虫やアリジゴクを見たとき「うわ、モゾモゾって動いてる！」「アリジゴクにつのみたいなものがあるよ！」と興奮気味に話しており嬉しさや喜びが伝わってきた。
- 木についた泡のかたまりがカエルの卵だと分かると「知ってる！木から落ちてオタマジャクシになるんや！」と言っており、知っていた知識と実際に見た経験が結びついた瞬間であると感じた。
- このカエルはきれいな水のところに住んでるんだって！」と話すと「え？この水きれいな？草いっぱいなのに…」と、水草だらけの池に不思議そうだった。
- 虫を見つけると「こっち来て！」と本当に嬉しそうに呼び、表情がとても輝いており、虫を発見した喜び、嬉しさがとても伝わる子供の声がたくさん聞こえた。

■今後の保育の参考になったこと■

- 五感をフルに使うような働きかけ、声掛けを保育者ができるよう心掛けていきたい。
- 木の下に白布を広げることで虫を見つけやすくなること。
- 大人がいきものを怖がっているのは子供も親しめるようにはならないということ。
- 足羽山の中で林の中を歩く道があることを知った。
- 園の近くにもこれほどたくさんの自然、いきものがあるのだと感じ、また足羽山に出かけてみたいと思った。
- 何度も行ったことがある場所だが知らないことも多く、保育者はあらかじめいきものがある場所やどんないきものがあるかをしっかり把握しておかなければいけないと反省した。
- 出掛けた先で全体を見るのではなく、細かなところにも目を向けてみようと思った。
- 子供のペースに合わせてゆったりと歩いたり、子供と同じ目線で見たりすることで、たくさんすることに気付けるのだろうと感じた。

■全体の感想や意見等■

- 今回は虫を顕微鏡で見る体験をできたことが、とても良かった。
- これからはもっと細かいところまで見たり、気付ける言葉掛けをしていきたいと思った。
- ヤスデなのかムカデなのかしっかりした知識が必要だと感じると同時に、講師の方がいてくださってこそ出掛けられると感謝している。
- シジウカラなどのさえずりを間近に聞きながら、とても心が休まるひと時でもあった。
- 園に帰ると、春の図鑑でアリジゴクやテントウムシを見つけて嬉しそうに見せてきてくれた。
- 今日初めて目にしたいいきものがたくさんいたので、嬉しさから「図鑑にも載っているかな？見てみよう！」という気持ちになったのではないかと感じる。

②夏の川遊び&保育士ふりかえり

活動名	川で遊ぼう
ねらい	①自然(川)に慣れる②道具に慣れる③生き物をよく観察する④生き物を捕まえる
実施日時	8月上旬 9:00~15:00
活動場所	大野市下打波の川
参加者	(年中) 13名, (年長) 15名
指導者	坂本 均

(活動実施プログラム)

- ライフジャケットを装着 ※保育士さんにも正しい装着の仕方を理解してもらう
 - ・きれいな澄んだ水を観て、これからの活動にワクワクの様子
- 川の水に少しずつ入り、浮かんでみる
 - ・はじめは、怖々の子どももいたが、少しずつ慣れてきた。
 - ・水の冷たさにはみんなビックリだ！
- 山から流れてくる冷たい水に入る
 - ・水溜りは温かく、山からの湧き水の近くはとても冷たいなど、場所によって水の温かさが違うことを肌で感じた。
 - ・ライフジャケットを装着したまま少しだけ浮いてみる⇒楽しそうに浮く子と怖々の姿だ。
 - ※保育士さんにも入っていただく。周囲の安全にも配慮。
- 河原で珍しい石を見つける
 - ・いろんな形や色をした石を探し始める。卵のようなものとか……
- おたまじゃくし、ヘビ、トンボなど生きものを見つける
 - ・石の裏に張り付いているカゲロウやビケラ等を探して捕まえたので双眼顕微鏡で見る
 - ・大きく見える姿に感動する子どもたちも。
- 休憩・・・川の水で冷やしたスイカをいただく
- 岸の方まで泳いでいく
 - ・プカプカ川流れ体験。怖がらない子どもたちのみの川流れ体験。
- ドラム缶風呂を薪で沸かし、入った。初めて入ったドラム缶風呂に大喜び
 - ・冷えた身体を温める。皆のお気に入り。



浮かぶ楽しさ



石の裏にいる水生昆虫を探す



ドラム缶風呂

【活動評価】

プールや公園等でしかできなくなった川遊び。自然の川にプールとの違いを感じたようだ。普段飲んでいる水や遊んでいる水と自然の中の水との違いや、温かい水や冷たい水があることを肌で感じたようだ。また、水の中にも生き物が住んでいること。自分たちよりも小さな生き物も生命があること。周囲の森にいてサンショウウオを探したりと森と水のつながりにもなんとなく理解したように思う。

保育士さんの「川遊び編／ふりかえり」

■感想■

- 川の水の冷たさを感じられたのが、とても良かった。
- 体をぎゅーっとちぢこませ、おもいきり声を出し、冷たさを表していた。
- 水が苦手な子も、川に入ってみたい気持ちの方が大きく、自分から入ろうとする姿が見られ、川に入ってから、とても楽しそうな表情が見られた。
- 流れる水に入ることを怖がる子もいたが、他の子を見たり、しっかり大人が補助することで、少しずつ慣れて、後には、自分から「もう1回入る」と水に入っていくことが出来てよかった。
- 初めて、川あそびに参加させてもらったが、子供達は、自然の水の冷たさを感じたり、様々な生き物達と触れ合ったり、とても素敵な体験が出来たと思う。
- 自然そのままの川で、自分で、どこなら安全に歩けそうか、考えながら歩いたり、流れに浮いてみたり、すごく喜んで遊んでいたことが印象的だった。
- 5才児がまず、ライフジャケットを着用して、水の流れに身を任せることを練習してから遊べたことがとても良かった
- 自然との触れ合いは、意欲に繋がる事が多い事を実感した。
- 沢登りが、子ども達には良い経験となったと思う。ドジョウ、カニ、タニシ、小魚などの川の生きものとの出会いも良かった。
- 慣れない川の岩の所で、歩くのがやつの様子の4才児だった。石をひっくり返すと虫がいることがあることを聞き、やってみようとする姿が見られた。
- 目が慣れてくると、いろんな生きものがいて、感動した。
- 体験したことは、すぐに描くというのが良いなと思った。
- 一つ一つの絵に対して、説明してくれ、子どもの今日の印象に残ったことを感じる事が出来た。
- 疲れて気持ちが入らないかと思っていたが、丁寧に、印象に残った事を描いていた子が多かった。感動する事の大切さを痛感した。
- 昨年に比べ水の量が少なかったこともあり、年長児も年中児も入れ、楽しそうにしていた。
- 久しぶりに石きりなどをして遊んだため楽しく、石でもこういう遊びができるということを伝えることができたのではないかと思う。
- いきもの探しや石きり、大きめの石からのジャンプなどとても楽しんでおり、川原でもこんなに楽しめるのだと感じた。
- 川に入っただけの遊びでは、流れを感じて遊ぶ経験は園ではできないため、体験できてよかった。
- 岩場のぼりでは、子供たちが自分の力で頑張る姿を見ることができ、なかなか経験できないことだと思うため良かった。
- 川で遊ぶにはベストコンディションということで、より危険なくおもいきり楽しむことが出来たということが一番良かった。
- おうちの人と川へ遊びに行ったことがあるという子はほとんどいなかった中、川の水の冷たさや川の水流れなど川ならではの特徴を全身で味わっていた。
- “友達と一緒にだからやってみよう”と挑戦する姿がいろんな場所で見られ、豊かな体験になったと思う。
- 夢中でカジカガエルやオタマジャクシをつかまえて見守る姿がとても微笑ましかった。

- いきものが大好きな男児たちにとっては本当に素敵な時間だったと思う。
- 川での遊びに夢中な子たちの興味を、十分に満足させてあげられる良い機会だったと思う。
- 上流のきれいで広々とした川の中で、子供たちを遊ばせることができた。
- 一緒に川に入ったり、ごつごつして歩きにくい岩場や川の中を体験でき、自然の素晴らしさや面白さを感じる事が出来た。

■遊んでいるときや描いているときの子どもの声■

- 草むらを「そーつとだよ そーつと！」と友だち同士声を掛け合いながら、ゆつくり歩く子ども達。
- セミとバッタと一緒に虫カゴに入れたため、セミが弱ってきて「セミ弱ってる。かわいそうやでセミだけ逃がしてあげよっさ」と逃がしてあげていた。
- 「プールよりつめたーい」と言う子ども。自然を身体いっぱい感じたようだ。
- 「先生！ここにもいた。見て！」と、普段、あまり虫を触っていることがない子が知らせてくれた、その姿が嬉しかった。
- 「冷た〜い」「こわ〜い」「おもしろ〜い」「これ、何っていうの？」自然の中で、五感で感じた言葉。
- 思い出を話しながら、それを絵に表していた。
- 「冷た〜い」など喜んでいる声が聞こえてきた。「怖い」「嫌だ」と言っている声は聞こえず、みんな楽しんでいると感じた。
- 「冷た〜い」と体で感じながらも、楽しくて、水のかけあいをしたり、泳いでみたりしていた。
- 性格かもしれないが、4才児の男児の安易に真似る姿。まだ、自分の能力やその場の状況をとらえることが難しいと思った。特に、身を守る能力について、周囲の配慮が必要だと気付いた。
- 石の裏に生き物がいると分かれると、夢中で石を裏返して探す子供達。どんな所にいるか、どうやって探すと見つかりやすいのかなど、知らせてあげると良いと感じた。私自身も、坂本先生から学んでいきたいと思った。
- 石をめくってみたり、水の中を覗き込んで、生き物を見つける子供達の表情は、いつもより、生き生きとしていたように思う。
- 石の裏に生き物を見つけ、思ってもいない所にいた事を、とても驚いた様子。生き物によって、生きている場所が違うことに気付いたのだと思う。
- 自分達で、石をめくったり、水中メガネで川の中をのぞいて見たりと、どこに何がいるかを考えながら、生き物を探している姿が見られ良かった。
- オタマジャクシが何匹もいて、「ぬるぬるして、つかまら〜ん」と、何度も挑戦していた。「見つからん」「つかまえて〜」という声は、今年は全く聞かれず、不思議なくらいだった。
- それぞれが心に一番残った場面や絵を描いているなと感じた。
- オタマジャクシを数匹描く子、川原で見つけたいろいろな石を描く子、青い空を描く子など、どの子も生き生きとした表情で描いており、とても楽しかったのだろうなと感じた。
- 年中児の頃と比べ、描きたいものが決まり描き出すのがとても早くなった。
- 年中児の頃と比べ、細かいところまでよく見て思い出して描いている子が増えてきた。

■今後の保育の参考になったこと■

- 講師の先生の考えさせる言葉のかけ方。

- 地球上には、いろんな場所で、いろんな生きものが生きているということ。そして命は繋がっていて、生かされ合っているということ、自然体験を通して、気付いていけるといいなと思う。
- 自然の中で、夢中になって、自分からやってみよう！探してみよう！と思える姿が多く見られ、嬉しかった。本来の子どもの夢中になれる姿が、沢山見られる保育をしていけたらと思う。
- 絵本や図鑑などから伝えられるものもあるが、やはり実体験に勝るものはない事を実感した。
- 水が苦手な子でも怖がらず、少しずつ慣れていく様子を見て、急に全身をぬらすのではなく、自然に、気付いたら全身が濡れて遊んでいる導き方が良かった。
- 力を抜いて、水の流れに身を任せることが大切。最初、怖がっていたが、「つま先を上にあげてごらん。絶対、沈まないから大丈夫。」の声かけで楽しめた子がいたこと。
- 普段から心がけているつもりだが、身を守る能力、注意力をつけていけるよう、普段の生活の中でも、気付かせていくことの大切さを改めて感じた。
- 川あそびの翌日、園に来ると、昨日見つけた生き物を図鑑で調べる姿がみられた。坂本先生に教えてもらった生き物の名前を口に出しながら、一生懸命探していた。見つけたものを知らないまままで終わらせないようにしたい。不思議に思ったこと、分からないこと、興味を持ったことは、一緒に解決していく保育をしたい。
- 近所にある小さな川などにも出かけて行き、どのような生き物がいるか、見てみたいと思う。
- 川での生き物達が、こんなにいる事を知り、水の生き物について学べた。
- 普段、川の生き物を見る事が出来ず、私達も伝えていなかった。身近な川にいる生き物にも、目を向けていくようにしていく。
- 顕微鏡で、最後、のぞいてみると、細かい部分がよく見え、子供達も真剣に見ていた。
- 保育士も見たことのない虫を見られた。図鑑等で詳しく調べてみる良いきっかけになった。
- 自分の体験したこと、感じたことをすぐに絵に表現する時間を持つことは良いと思った。
- 体験してすぐに描くことで、自分の描きたいことが描きやすいようだった。
図鑑等で、つかまえた虫を探して見つけて大喜びしていた子が多く、好きなことを、とことん楽しませてあげることが大切だと思う。
- 体験したこと、経験したことをその場ですぐに絵に残すことで子供たちにとって描きやすく、子供たちにとって何が一番印象的だったのか知ることが出来るためいいなと思った。
- 心に残っていることは一人ひとり違うため、絵に表すことで一人ひとりの印象に残っていることが分かるのだなと思った。

■全体の感想や意見等■

- 子供達のとてもしょうな顔が印象に残る。みんなが、初めての川遊びに大喜びしていて、やはり専門の先生がいらっしやる事が一番安心だと感じた。
- 子供達が自然の中で生き生きと過ごせることを実感した。ドラム缶風呂にも入れてもらい、普段出来ないような経験が出来、また同行した保護者にとっても貴重な経験になったと思う。もう少し長く滞在していたかった。
- 子供達みんなが喜んでいて、楽しめていたことが一番、印象的だった。
- 保育者も、川の冷たさ、川の生き物に触れるという貴重な体験が出来、もう一度行ってみたいと思った。

- 小さい子供の頃から、自然に触れる機会を持って育つと、伸び伸び出来ると感じた。
- 近くの民家で休憩させてもらったり、ドラム缶風呂に入らせてもらったり、普段なかなか出来ない体験をさせてもらえ、子供達もとても楽しかったようだ。
- 昨年に引き続いての自然体験なので、子供達は戸惑いの声が聞かれず、川の生き物に対しても絵を描くことに対しても、とても楽しそうに取り組めていて、驚くくらいだった。
- 自然の素晴らしさ、厳しさ、偉大さを肌で感じる事が出来るような体験をさせてあげられると良いと思う。
- 自然の中で、工夫したり、考えることが生きていく上の原点で、生きる力を与えてくれると思う。
- 普段とは違う、自然での生活の仕方なども知っていききたい。
- 日常の保育では経験出来ないような経験をさせて頂きたいと思う。
- 水が苦手な子もいたが川遊びを通して、園のプール遊びでは初めて自らワニ歩きをする姿が見られ、水に親しむ良い機会になったと思った。
- 川の中で遊んだり、いきもの探しをする子もおり、そんな一人ひとりの楽しみ方を認めてあげながら、無理なく遊べる場や雰囲気、ゆっくりと流れる時間がよかった。
- 子供たちから始まった「石屋さん」がとても楽しそうであった。
- 4歳児が一つずつ不安げで恐る恐るの姿だったため、「ちょっとドキドキ…だけどやってみよう！」という気持ちが持てるような日頃の援助の仕方を考えようと思った。

③秋の雑木林と稲刈り後の田んぼ&保育士ふりかえり

活動名	雑木林の生きもの達
ねらい	①場所の変化に気づく②小さな生き物を発見③よく観察して表現する④森のつながり
実施日時	8月下旬 9:30~14:00
活動場所	福井市安居城址
参加者	(年中) 13名, (年長) 13名
指導者	坂本 均

(活動実施プログラム)

○山を登る

- ・ヤスデを見つけ、みんなで手のひらを並べて、その上をヤスデに歩かせてみて観察した。
- ・樹木に創られた大きな洞(顔が入るほどの)を見つけて、何がいるかのぞいてみたり、樹の神様自分の夢をかなえてくれるように、洞の中に向かって願をかけたりもした。
- ・森の中では、ザトウムシを見つれたり、きのこを見つれたり、秋の自然に親しんだ。
- ・また道々、あり地獄やクワガタやセミの抜け殻を発見して、みんなで感動を共有した。
- ・季節や場所によって、生きものが違うことを感じた。

○網を一人ずつ手にして、山にいる虫を捕まえた。

○草むらにいる生き物を、携帯虫眼鏡、顕微鏡などで観察した。

○感動を絵に描く

- ・今日、見つけた生き物や景色などを、丁寧に描いた。



ヤスデの列車遊び



採取網を使う



発見した生き物を描く

(活動評価)

川辺から一転しての雑木林での活動。いきなりの崖登りに年中の子どもたちにとってはしんどいかなと思われたが、歯を食いしばりながらも登っていく。一回目と比較すると、自然の中での動きが明らかによくなっている。保育士さんも子どもたちへの支援を極力少なくして、声かけに集中している。登った後の子どもたちの笑顔がとても印象に残っている。ヤスデを見つけると「ムカデ」と大声を出しびっくりしていた。今回の雑木林は、斜面もあり道から外れることは極力避けるようにした。少し、平らな広場で雑木林の「いきもの見つけ」に挑んだが、たくさんの生き物を見つけることは出来なかった。道のわきには結構大きなナラがあり、その下に生息するアリジゴク(ウスバカゲロウ)が今回の子どもたちの目にとまったようだ。掌で巣の下からすくい上げると出てくるアリジゴクにみんな仰天していた。「ふりかえり」では多くの子どもたちがそのアリジゴクを描いていた。虫眼鏡で大きく拡大してみるように声をかけると、その手足をはっきりと描く子もいた。よく見ると面白い!そんなことに気がついたのではないだろうか?ザトウムシもたくさんいたので、ザトウムシが食べるものを説明した後に、森の中の循環についてQ&A形式で説明する時間を設けた。保育士さんにとって森の中の生き物と植物のつながりが理解できたようだった。

■感想■

- 森の中を歩くことで、歩きにくい道を体いっぱい使い、また頭を使いながら進んでいくということが、とても良い体験となった。
- 崖をよじ登ったり、木の穴にお願い事をしてみたり、小さな虫を手のひらにのせて見てみたり…
- 何回か、生きものみつけに参加し、経験させてもらっていることで、自分たちで、次、何をするのか考え、楽しみながらお弁当を食べていた。
- 自分の一番心に残っている虫やお気に入りのものを、まず描こうとする子どもたち。とても大切に描こうとする姿が見られた。
- 虫を見つけた時の様子を話し合いながら、本当に楽しそうに描いていたように思う。
見ながら描く子や、山に登っている時に、印象に残ったことを描くなど、一人一人、感じ方が違うなと思った。
- 普段の生活では、なかなか体験出来ない自然が沢山あり、熊の跡を見たりと森の中でしか見れないものが沢山あり、とても良い経験だった。
- 落ち葉の上を歩いたり、やわらかい大地を感じたり、全身で豊かな自然を味わえてとても良かった。
- 沢山の落ち葉の上や、木の間、くぐったり、ジャンプしたり、歩いて進んでいくだけでも、子供達は楽しいことばかりで、街では経験できない、良い経験になった。
- ハックルベリーのある森に足を踏み入れると、別世界に来たような気持ちになる。子供達の表情も荒々しさがなくなり、子供本来の姿を見せてもらい、改めて自然と触れ合う事の大切さを感じた。
- 普段の生活では、なかなか体験できない自然が沢山あったり、熊の跡を見たりと森の中でしか見れないものがたくさんあり、良い体験だった。

■遊んでいる時の子どもの声■

- 「歩きにくい」「滑る」「怖い」「登れない」など、どの声も、普段歩く道では、出てこない言葉だったので、ひと言ひと言が子どもにとっての気付きだったと思う。
- 小さな虫を手の平にのせる時、「勇気のある子やってみね」と言われ、最初は「こわ〜い！」と言っていた子も、他の子がやっているのを見て、自分もやってみて、「かわいい〜」に変わったことに驚いた。
- 一人違う方を向いて、食べていた女の子に、「お友だちの方を向いて食べたら？」と声を掛けると、「ん〜ん、いいの。私は今森を見ながら食べてるから、その方が気持ちいいから」と答えた。
- 「よ〜く見よ！」「よ〜く見よ！」と友だちと飼育ケースをのぞき、観察しながら描いていた。
- 目を皿のようにして、友だちと「よ〜く見よ」「あつ、目ここにある」などよく観察していた。
- 「友だちと〇〇見てるところや」「この虫描くの」と自分達の思い思いの絵を描いていた。
- 「高いから怖いけどやってみよう」木の枝にまたがり、「木のブランコ」と大人からはただの枝でも、子供達にとっては、遊びの道具になっていくと改めて感じた。
- いい匂いのする葉を見つけ、お母さんにも嗅がせてあげたいと、ポケットに入れて持って帰ってきた子がたくさんいた。
- 「え〜ここ通るの〜！」とワクワクした表情で登ってみたり、落ち葉が降ってくる様子に「きれ〜い！」と声を上げていた。

- 「なんかくさ〜い」「くまのウンチ」「この穴は何かな」など自分で発見して自分で想像して、友達同士で楽しんでいる姿。
- 絵を描きながら、思い返し、思い出を話しながら絵を描き足していく子がいた。
- 「この黄色い葉っぱが、とてもいい匂いしたの。お母さんとお父さん、ケンカしてる時、こっそり嗅がせてあげるの！」と、クロモジの葉の絵を描いている子がいた

■今後の保育の感想になったこと■

- 生きている生きもの以外に、死んでいる生きものにも、目を向けることも大切だと感じた。
- 体をいっぱい動かした後の食事、自然の中での食事。これ以上美味しく感じるシチュエーションはないな、大切だなと思った。
- とにかく、一杯体を動かして遊ぶこと、特に戸外で自然の中で……。体を動かし、心を動かしたあとの食事は、格別だったと思う。
- 遊具も何もないところでも、子供達が時間を忘れ夢中になって遊んでいる姿を見て、自然物を与えるだけで、遊びを考え出し、それが子供達にとって楽しいものだと感じた。
- 子供達が五感を使って様々な感動を味わえるように、保育士が気付くことはもちろん、子供達が感じ取っている事に敏感に反応することが大切だと思った。
- 風の音、木の葉の揺れる音に、耳を澄まし、全員がし〜んと聞いてみる瞬間が印象的で、今後、取り入れていきたい。
- 坂本先生が森の中を歩きまわりながら、気付いて欲しいところ経験させたい所をきちんと伝えておられた事。
- 子供の感じる所は、一人一人違う事を改めて実感。一人一人を分かってあげたい。
- 時間がたってからでは、なかなか描き出せない子でも、体験した直後に描くことによって、感じたことが描けると感じた。
- 絵を描く前に、今日あった感動を一度、言葉にして伝えてあげたいと思う。
- 経験した中で一番印象に残ったところ、楽しかったところが絵によく出てくると感じた。こういう感動体験をどんどんさせてあげたい。

■全体の感想や意見等■

- 今までとは違う、山での体験にいろんなことにワクワクさせてもらえる1日だった。木の神様や山の神様のことなど、子どもたちも、ワクワクさせてもらえる話や、崖のぼりの挑戦など、すごく楽しませて頂けた。ありがとうございました。
- 今日の山に、もう一度、みんなで行きたいです。いろんなことが体験でき、とても楽しい1日だった。ありがとうございました。
- 出来る限り、自然と触れ合う体験をさせてあげる事が大人の役割だと思う。
- 普段、なかなか行けない場所で、いろんな経験をさせてもらったり、身近な園の近くの自然で、「こういう楽しみ方もあるんだ！」というやり方など、参考にさせてもらいたい。

活動名	秋の田んぼで生きものみつけ
ねらい	①環境の違いと生き物の種類に気づく②自分たちで生き物を発見・捕まえる・観察・描く
実施日時	10月上旬 9:00～12:00
活動場所	福井市岡保地区田んぼ
参加者	(年中) 13名, (年長) 13名
指導者	坂本 均

(活動実施プログラム)

- 絵を見てこれからの活動に興味を持つ
 - ・ 田んぼには、どんな動物がいるのか絵を見て想像してみた。
- 網、スコップの使い方を確認する
- 田んぼのグループと用水路のグループに分かれて、生きものを探した
 - ・ 網と虫かごを持って、チョウチョウやコオロギを捕まえる子、シャベルで土を掘り起こして、ミミズ、カエルなどを捕まえる子など、大喜びで生きものを見つけていた。
 - ・ 用水路へスコップを入れて、泥ごとすくって、何の生きものがあるか探してみた。
 - ・ ドジョウ、ザリガニ、ヤゴ、タニシ、ニマイガイなど、沢山の生きものが見つかり、その度に友達同士感動を共有していた。
- 今日見つけた生きものの絵を会描いた
 - ・ 今日の活動で見つけた生きものを見ながら、絵を描いた。
 - ・ 「カエルを捕まえているところだよ」「トンボが沢山いたよね」「ドジョウが泳いでいたよ」などと話しながら、楽しい雰囲気描いていた。



バッタ類採集の様子



ドジョウ・ドンコ観察



ふりかえり

(活動評価)

今回は、町周辺の秋の田んぼでの活動に絞った、春のお山の田んぼとの生き物の多様性の差に気付いてほしかった。開始前に、丸や四角や三角を利用して生き物の身体の特徴をQ&Aで子どもたちに質問していく方法をとった。鳥や昆虫や魚など生息場所や暮らし方でことなる身体を持っていることを理解することに努めた。山や川といった自然と異なり、子どもたちに対して注意を凝らして周囲を眺めること、探してみることを伝えた後の「いきものみつけ」だった。小さな用水の泥の中をスコップや網ですくってみると、大小のドジョウやザリガニにびっくり。ドンコもいたりして自分でつかんでトレーに入れる動作には、たくましささえ見られた。広場があれば網を持って追いかけてまわす、水があれば網を入れて探してみる……子どもたちにはこのような体験がこの1年間で十分に根付いたのではないかと捕まえてた生き物を観察して描くという一連の流れも、子どもたちにとってはそう難しいものではなくてきているように思われる。お山の田んぼはあぜ道があったが、街中の田んぼにはあぜ道はなかった。どちらが子どもたちの原風景として残っていくか?楽しみでもある。※さすがにザリガニを掴める子は少なかった。

■感想■

- すっかり小さい生きものに慣れてきて、怖いけど、「捕まえてみよう！」「触ってみよう！」という姿がいっぱい、とても良い体験が出来た。
- 田んぼの中の生きものと、田んぼの横の水路とでは、住んでいる生きものが全く違い、子ども達はその違いに気付くきっかけに多少なっただけではないかなと思ひ、良かった。
- 生きものがいて、一緒に生活しながら同空間で作物を育て、それを頂いている…とても有難く感じた。
- 最初の頃に比べると、自分の描きたいものを見ながら描くということに、少しずつ慣れてきた様子。
- 見ながら描くことに、だいぶ慣れてきたようだ。細かいところ(足の形、ヒレの様子…)なども描くことで、また気付いていたようだ。
- 描きたい生きものを喜んで描き出す子ども達の姿が印象的であった。
- 田んぼの排水路でいきものを網の中に追い込む方法を教えてもらひ、子供同士で協力してドジョウなどを見つけることができ感動の連続であった。
- 見ただけでは何もいないところに、上手にいきものが隠れていることに気付くことができ、子供たちは夢中で楽しんでた。
- 子供たちも私も初めて参加し、田んぼや側溝に入ることを嫌がる子がおらず、みんな楽しめていたように感じる。
- 田んぼや側溝に入る機会は滅多にないため貴重な経験ができた。
- 田んぼの側溝だけであんなにも子供たちが夢中になって遊べることに感動した。
- はじめはドジョウやカエルを触れなかった子も、勇気を出してちょっと触ったことがきっかけにより積極的に遊びだす姿が見られとても嬉しかった。
- その時の感動や心の中に残っているイメージを思い通り描くことは大人でも難しく、4歳児5歳児の子供にとっても少し難しいのかなと思つた。
- カエルやドジョウが強く心に残った子が多く、ドジョウを描いている子が多かったが、「カエル、描けん！」と言う子が2人ほどいて絵を描くという経験をたくさんさせようと思つた。
- 遊んでいる場面を描く子が多く、1つ1つのいきものをじっくり観察できるような心掛けが足りなかったかなと反省が残る。

■遊んでいる時や描いている時の子どもたちの声■

- 初めての頃と違い、見つけたものを自分で捕まえ、本当に嬉しそうに「先生、見て～！ほら、自分で持てたよ！」と自分で持てたことが嬉しくて、大きな声が響き渡っていて、私も嬉しかった。捕まえた虫を容器に運ぶ時も思わず、子ども同士歌うような声がよく聞こえていた。
- 「カエル触ったよー触った！触った！」と嬉しそうに、初めて触った子が伝えに来る。
- 「泥があるで、生きていけるんや～」など、その場の特徴に気付きながら、良きものの住みやすい場所に興味を示していた。
- 「ここは、こんな色！」とクレヨンを探しながら、その虫の色を探していた。
- 「虫めがねで見よ～」と細かいところまで“知りたい”“見たい”“描きたい”という気持ちが出てきたことを感じた。

- ドジョウがによろによろつかみにくく「気持ち悪いなー」と言っていた子も他児がつかまえて得意気にしていると「次は持つぞ！」と勇気をもって挑戦しようとしていた。
- 「岡保ってなんていいとこなんやろ…」といきもの大好きな男児がカエルを可愛がりながらつぶやいていた。
- 講師の方がドジョウを網から出したとき「ぼくが捕まえる！」と男児たちが駆け寄り、我先にと手を伸ばしヌルヌルして捕まえにくいドジョウを触り楽しんでた。
- 普段なかなか触れることのないドジョウ、ヌルヌルして捕まえにくいということが「ぼくが捕まえたい！」という気持ちを強くしたのだろうと思った。
- ヌルヌルして捕まえにくいドジョウを前に、「つかまりたくないでヌルヌルにしてるんや！」などと経験からいろいろ感じ考えたことを友達同士で伝え合っていた。

■今後の保育の参考になったこと■

- 虫を探し始める前に、形を見せ、「どんな虫がいるかな？」と子どもが想像して、どんな虫が見つけられそうか、その気持ちになっていける導入の仕方。網の用水路や水の所での使い方など
- 川に住む生きもの、土や草地の生きもの、4、5歳児が分けて探すことで、漠然とかもしれないが、それぞれの生きもの環境の違いを感じられたのではないかと。形や住む場所など、いろいろな分類の仕方生きものを見ることの大切さに気付いた。
- 講師が、形から生きものを連想させていく様子を見ていて、こういうところに目を向けさせてあげると良いと思った。
- 体験し、感動することできものの名前や姿だけでなく、生態や細かな様子を知ることができ、さらに興味が深まり「大切にしたい」という愛情も出てくることを感じた。
- 荒っぽい扱いで弱ったり死んでしまうことを何度も経験してきたが、その経験こそ大切だと思う。
- 人の手のかかかっていない自然の素晴らしさを改めて感じ、もつともつと自然に触れて遊ばせてあげたいと思った。
- いきものがある所とない所の違い、またいる所はどんな所なのかなど細かい点まで子供たちに気付かせてあげることが大切だなと思った。

■全体の感想や意見等■

- 昔は、稲刈りを終えた田んぼは、見晴らしもよく、安心な遊び場所だったが、今では殆んど、田んぼに子どもの姿が見られなくなった。農業がどんどん大規模化し、個人から法人になり、子ども達にとって、段々遠いものになってしまったことに気付いた。昔を知っている私達が、昔と過去のことにしてしまわず、どんどん楽しさや不思議さを伝えていかねば…と思った。
- 本当に身近なところに様々な種類の生きものがたくさんいるんだなと驚いた。
- 「いきものを全部連れて帰りたい！」という子供たちであったが、「ドジョウやカエルは田んぼにとって大切なものなんだよ。だからここに住んでほしいな」と伝えるとしっかり理解し納得してくれた。
- 人間といきもの、いきもの同士の関係を自然と触れ合うことで感じ取っていただけるのだと思う。
- 身近だが、機会がないと経験することのないとても貴重な“いきものみつけ”だった。
- 保護者の方から「家に帰ってドジョウを捕まえたことを嬉しそうに話してくれた」「普段経験できないことなので良かった」などの声があり、喜んでくれた。

- 身近にドジョウがいるのだと私自身気付くことができ、子供にとっても私にとっても新たな発見、気付きがあり良い1日だった。
- 泥に水にいきものに積極的に泥んこになって遊ぶ子供たちがとても生き生きして嬉しかった。
- これまでの経験があるからこそ、あのヌルヌルしたドジョウも嫌がることなく「かわいい」と感じ、「自分で触りたい」と思ってチャレンジできたのだろう。
- いきものは人間の生活にも関わっているということに気付き、身近ないきものを大切にしようとする気持ちが強くなっていることが保育者として嬉しかった。
- 次回の雪山でのあそびが楽しみである。

④冬の雑木林&保育士ふりかえり

活動名	冬の雑木林でいきものみつけ
ねらい	①生き物の冬越しを理解する②冬の森を体感する③冬の生き物の食べ物を知る
実施日時	2月上旬 9:00～14:00
活動場所	大野市南六呂師 ハックルベリーの森
参加者	(年中) 15名, (年長) 14名
指導者	坂本 均

(活動実施プログラム)

○ 冬の雑木林を散策

- ・ 木の周りの穴や、木の皮をめくって、生きものがないか探してみた。
- ・ ウサギの足跡や尿を見つけて歩き方を観察。近くには確かにウサギの糞を発見。
- ・ 狸の糞も発見し、生きものの姿は見れなかったが、生きものの存在を感じた。
- ・ 木になってる蕾を発見し、春への準備を感じる。
- ・ 木にヤママユガとウスタビガのマユの抜け殻を見つけた。
- ・ 雪を掘り、雪の下に生きものがないかを確認。

○ 雪遊びをする

- ・ 雪山を、ソリは使わず、体だけで滑ってみた。
- ・ 雪の感触を思い切り楽しんだ。

○ 生きもののお話

- ・ 雑木林にいる動物について、ぬいぐるみを見ながら話し合い、生きものの冬の生活に、思いを馳せた。
- ・ 雪の上に寝転んで、静かに、動物の気持ちになってみた。

○ 今日見つけた生きものの絵を会描いた

- ・ 今日の活動で見つけた生きものを見ながら、絵を描いた。



越冬の昆虫を観察



生動物の足跡や体毛



雪の上に寝転んで見る

(活動評価)

最後の「いきもの見つけ」は冬の雑木林。どこにもいそうもない生き物を探してもらうのに枯木の皮をめくったりすることで子どもたちは、小さな虫たちの冬越しを発見していた。

無数にみられるウサギの足跡が強く印象に残っているようで、描く子どもが多かった。また、雑木林に現れる冬の生き物たちのヌイグルミを利用して、生き物のつながりをみんなで話し合った。持ってきたオニグルミを一つずつ渡して、リスのためにそれぞれ思い思いの場所に置いてきた。小さな生き物たちが、この冷たい雪の中でどのように過ごしているのか?みんなで寝ころんでみることで、今まで自分たちが関わってきた生き物たちについて静かに思い出してもらった。

■感想■

- 冬の自然が生きている事を肌で感じた。子ども達に伝える場があったこと、良かった。
- 秋と同じ場所ということが分からないくらい、全く違う景色になっていて驚いた。
- ウサギの足跡をよく見たことで、それを絵に表す子が多くいた。子どもは一番印象に残っているものを絵に表すと思った。
- ウサギのウンチが印象強かった子が多かったのを感じた。
- 初めていきものみつけに参加。つらら、動物の糞、虫の冬眠、動物の足跡など、自然に触れることが出来、子供はもちろん、大人もとても楽しめ、感動させられた。
- 秋に来た時と全く景色が違い、雪の多さに驚いた。
- 子供達は、絵本でしか、知らない冬の雑木林に実際に入っていきそうな気持ちだったように思う。
- 秋とは全く景色が違い感動的。そこでいきものたちがどのように過ごしているか、興味深かった。
- おおきな岩に沢山積もっている雪の上に登る子供達が印象的。人工的な遊具で遊ぶより、真剣な気持ちが伝わってきた。
- 自然の中では何もおもちゃはいらないことを本当に実感した。
- その森の中で生きているいきものを見つけたり触れたりすることは、厳しい冬を乗り越え生きているいきものたちの生命力の強さや、自然の不思議さをも実感できる場なのだとこの体験の貴重さ、重みを感じた。
- 延期が重なり子供たちも待ち遠しかった様子であった。
- 雪が残っているか心配だったが、雪があったことで雪に触れて楽しめた。
- うさぎのうんち、足跡、おしっこ跡がたくさん見られ、雪山ならではの素敵な経験ができた。
- 木の中で眠るいきものを見つけるなど、町の中では決してできない雪遊びができた。
- 雪の上のうさぎのおしっこやうんち、足跡を見ることで、うさぎがどの方向から来てどちらの方向へ行ったか知ることが出来た。
- 木の皮の中から蜘蛛の巣、冬眠していた蜂、キツツキの穴、つらら等を見つけ、どれも関心を持って観察することが出来た。

■遊んでいる時や描いているときの子どもの声■

- 「わぁ～おとし穴がある～」と木のまわりの雪の溝を覗いていた。こんなにも雪が積もっている上を歩いていることに驚いていた。
- 木の皮をめくり、卵を探したり、小さなクモがいたら、「あっ いるんだ～！」と驚いていた。
- ウサギのふわふわの毛を一生懸命「ふわふわやったの！」と描きたがっていた子がいた。
- ツララを手に「宝石屋さんしよう」「見て～アイスみたい」とうれしそうなお子供達が印象的だった。
- コゲラの開けた穴に虫たちが木の皮の中にいること、木の周りだけ雪がとけて下まで見えるところを、覗き込むように「ホラ、ここみて！」と友達に教えあう声が多く聞かれた。
- 「ここにも穴あった～」など、小さな穴から、大きな穴まで、いろんな穴を見つけて、ほじったり、のぞいたりと喜んでた。
- 「次は転がろうぜ！」や雪山から滑る際、「つながろうー！」など夢中になって遊んでいた。
- 子ども達が「こっちに〇〇あるぞー！」「一緒にすべろー！」など、子供同士で考え、誘い合い、本当に生き生きと楽しそうだった。
- 「次は、こうしよう～」「〇〇してみ　市街地のお子供達の、とても大切な体験の機会だ。是非、こ

れからも続けて行って欲しいと願っている。」など、自分たちで次々に遊びを考え出していた。

- 「これ、先生がはまったところやよ」「これ、滑っているの雪を歩いている時、「はまったり、ジャンプしたの！」と生き生き話していた。
- 実際、生き物の姿は見えなかったが、木をつついた跡や糞から、キツツキやウサギを描く子もいて、イメージを膨らませていた。
- うさぎのうんち、おしっこ跡などを見つけると「あーあつた！」という子供の嬉しそうな声が印象に残る。
- 木の周りに60cmくらい穴があって、その穴(入ると子供たちの胸の高さまで雪がある)に入るのが嬉しく「あーはまったわー！先生見て！」と大喜びであった。
- 「木の中は暖かいのかなー」と木の皮をめくって見つけた蜂について考えていた。
- うさぎのおしっこやうんちに関心を持ち、臭いがしないことを確かめていた。
- うさぎのうんちを集めているところの絵を描きながら「1匹がこんなにいっぱいうんちするのー？えー！」と想像し楽しんでた。
- 絵を描きながらいろいろ考え思い出したり、イメージを膨らませているのだなと思った。
- 「ウスタビガ」の名前を知っている物知りのお子もおり、図鑑等で確認していたことが印象的であった。

■今後の保育の参考になったこと■

- 冬の自然といって、雪が降るとすぐに、「雪あそび」となって、雪遊びをするのですが、いろんなところに目を向け、生きものの生活を知ったり、発見する喜びを感じる事が出来たことがすごく良かった。
- 専門の先生がいて下さったことで、どういう所を見ていくといいか、ウサギの足跡、狸のウンチなど見つけられることが出来た。
- よく見る、よく観察する、何故か考える。日々の保育でも大切にしなければいけないと思う。
- 一人一人、やはり感じる所が、違うてだなという所。
- 人工的なおもちゃは何もなく、雪山を歩くだけでも、時間がたつのが早く感じ、自然だけでこれほどまで遊べるとは驚きだった。3歳児のクラスの子供達に伝えてあげたいと思った。
- 遊びを提案しなくても、子供達から自然と遊びが始まった。そのような姿を大切に、そこから遊びを広げていけるようにしたい。
- 雑木林の中での絵本がとても印象的だった。また自然に目を向けるヒントを投げかけ、自由に散歩する中で子供達が見つけ出す様子にも興味や関心が広がっていくことを感じた。
- 雑木林の中で読んでもらった絵本がとても良かった。園でも散歩の時など、自然の中で見せてあげられる場や絵本を考えていきたい。
- 「危ないよ」など、止める言葉を殆んど使わなく、最低限の伝え方だけだったこと。
- 自然は、人工のどんなおもちゃより、子供を生き生きと主体的にしてくれることを改めて実感した。
- 体験した事を絵で表す事で、子供が何を一番強く感じたか知ることが出来て、楽しく感じた。
- 実際見えていなかった世界ですが、イメージを膨らませていけるような伝え方がとても素晴らしいので、心がけたい。

- 感動をすぐに、その場で絵に描くということが少ないため、そのような時間も大切に考えたい。
- 5歳児は“いきものみつけ”を楽しんでおり、一方で4歳児は雪遊びを楽しんでおり年齢によって興味、関心の持ち方の違いが分かった。
- 園庭だけでは体験できないことをさせてもらってよかった。
- 今日体験したこと、発見したことや嬉しかったことなどを忘れないよう、話す時間を設けていきたいと思った。
- 冬眠していた蜂を室内へ持って帰ってきたことで、林で蜂を見れなかった子ども、より観察し考えが深まることに繋がっていいなと思った。
- 自然界をじっくり見ることでいろいろな様子や姿がわかった。

■全体の感想や意見等■

- 本当に、良い機会を与えて下さって、有難かった。市街地付近の子ども達にとって、これまで全く体験する機会がなかった環境の中に身をおき、五感をフルに使うことで自然を体験させてあげることが出来た。
- 5回の貴重な体験ありがとうございました。川・山・森・田んぼと多様な場所での経験、本当に豊かな1年間だった。心から感謝しております。ありがとうございました。子ども達の育ちの変化を実感した。
- 普段出来ない自然体験ばかりで、子ども達は、いろんな感情を抱き、とても喜んで参加していてとても良い活動だと思った。
- 初めて雪山で、保育者も初めての体験だったが、普段では経験できないことで、良い体験をさせて頂いた。
- 市街地の子ども達の、とても大切な体験の機会だ。是非、これからも続けていって欲しいと願っている。
- いきものの生命力を感じ、命の大切さや生きる力を育てていけると良いと思う。
- 春夏秋冬の中で、どれも大切だが一番冬の活動が大切なのかなと感じた。
- 延びて延びての“いきものみつけ”であったが、それがより一層“いきものみつけ”が楽しみになったのではないかな。
- 雪はもう解けて無くなっていると思っていたが、思いがけない雪遊びができそれも子供たちは幸せに感じ楽しかったことと思う。
- 雪の中にもいきものがあることや春に向けて木が芽吹いていること、杉の木を揺する喜びなど冬ならではの素晴らしい経験を体感することができた。
- 自然とかかわって遊ぶことが減ってきている今、子供たちに意図的にこの場を体験させることが必要で、親たちに代わって支援していくことが大切だと思った。
- 来年もたくさん自然に触れて遊ぶ体験ができると嬉しい。
- 感受性の豊かなこの幼児期に、年間を通して“いきものみつけ”を経験することは何よりも代えがたいものだと思う。
- 五感を通して感じたことは、大きくなっても根っここの部分に残るものだと信じている。

Ⅲ 全体をふりかえって気づいたこと(担当保育士より)

自然体験活動を通して、変化した子供さんがいらっしゃいましたら、どのような変化があったかを教えてください(事前にどのような子供さんが→どのように変化したか)。

- 虫に触れなかった子が、積極的に虫探しをしたり、触れたりするようになった。
- 無気力に見え、気になっていた子が、意欲的な行動、表情が見られるようになった。
- 初めは、自分で生きものを見つけたり、探したり、捕まえたりが出来ず、「先生～」と保育者に助けを求めている子が徐々に友だち同士で自分で、取り組むようになっていった。探し方のコツが分かっていったのもあると思う。
- 全体的に、行動がゆっくりになることが多いクラスなのですが、回数を重ねていくことで、自分の荷物の始末や、準備など、自分でしていくことが意識できるように、少しずつなってきたように思う。
- 自分からやり出すことが、不安そうだった子も、友だちや年長さんの姿を見て、「僕もやる！」と川の流れるにゆられてみたり、そういう姿が最初と変わったと思う。
- 初めての時、生きものを見つけると、「先生とって～」「取って」「ちょうだい」という声が、あちこちで聞かれた。しかし、講師が「見つけたら、自分で捕まえような」と言い続けて下さったので、子ども達も次第に勇気を出して、捕まえて、歓声をあげて見せてくれるようになった。大きな大きな成長だった。
- 遊具がない公園では、「何にもない」とつまらなそうに言っていた子も、自ら隅っここの草むらや木の周辺を覗いてみるようにして虫探しを始めるようになった。
- これまで、園庭にクモがいると、とても怖がっていた子、体験を通して生きものへの抵抗がなくなってきたように思う。ありがとうございました。
- 実際に見たり体験することで、さらにいきものや自然に興味や関心を持つのだろうと思うため、直に自然に触れることの素晴らしさを改めて感じた。
- いろいろな場所、いろいろな季節のいきもの探しを経験する中で、いきものと棲み分け、共存していくことを認められるような大人に育ってくれたらと願う

IV 子どもたちが「ふりかえり」で描いた絵 ※同児童の年中から年長の絵画の変化

年中と年長の時の変化を中心に、昨年から参加している子どもたちの描いたものを選んでみました。「思いを形にしてい」かや、子どもたち自身の発達をも見てとれます。また、描かれている対象物も年中では生き物などが多いのに比べ、年長になると自分や友達を中心に描かれているのが特長的です。体験活動も、発達の変化が著しい幼少期には、詰め込みではなくじっくりとひとつの物事に取り組んでいくことや、「今見ている又は関わっている事象」を指導者・保育士さんが心と身体で受容できるようにサポートしていく(見守り、意識して承認したりといった掛け声等)ことが大切になってくる。そのことを、保育士も保護者も私たち自然に関わる指導者も理解できました。



A子4歳 ～川の中に石がいっぱいあったよ～



5歳 ～お水がキラキラしていた
ライフジャケットを着て入ったよ～



B子4歳 ～チョウチョ、カエル、クモ～



5歳 ～いい臭いの黄色い葉っぱキノコ、
クモの巣～



C子4歳 ～虫カゴの中にあるバツタとセミ
セミは弱っていたのでにがしてあげた～



5歳 ～木に乗って揺らして遊んだよ～



D男4歳 ～クモだぞ！～



5歳 ～木のハシゴに登って遊んだよ～



E男4歳 ～カエル、トカゲ～



5歳 ～クマのつめ跡の場所～



F男4歳 ～……～



5歳 ～いい臭いの葉っぱがいっぱい
あったところ～



G男4歳 ～コオロギを草の山でみつけたよ～



5歳 ～ぼくが木に登って遊んでいるところ
だんだん葉っぱが落ちて木が枯れてきた～



H男4歳 ～うさぎ・たぬきのうんこ。ゆきだるま。



5歳 ～木の高いところに登ったよ～



I子4歳 ～クルミ、ウサギのあしあと～
みつけたよ～



5歳 ～木からジャンプしているところ～

【ふりかえり考察】

本事業の園児の「ふりかえり」は、年中も年長児童も体験したことを描いてもらいました。心身の発達による変化の特徴として、年中児童では「観たもの」がテーマとして描かれているが、年長児童になると、主体が自分になって遊んでいる風景や関わっている様子が描かれています。個々によつての違いはありますが、年代によつて児童へのアプローチの方法を変えていくことで、より効果的な「in」の体験と共に、年長へのつながりを意識した取り組みが出来るように思いました。年中・年長とわずか1歳の差ですが、このころの1歳はとても大きな心身の発達があるようです。

Vいきものみつけ活動保護者アンケート 年度第1回終了後

1.お子さんは昨年もこの活動に参加しましたか。 ハイ…45 イイエ…3

2.今日の野外活動(自然体験)について、お子さんは家族の方にどんなお話をしましたか。

- ・アリジゴグやモリアオガエルの卵、大きなヤスデなど見たことのないいきものの発見や感動を話してくれた。
- ・家の近くでは体験できないことを、真剣に家族に伝えてくれる。
- ・「何が一番楽しかった？」と聞いたら、「顕微鏡で虫をのぞいて、虫が大きく見えたこと！」と話してくれた。
- ・「近所で見かけるダンゴ虫よりも大きなダンゴ虫がいたよ！」と教えてくれた。
- ・大きい虫がどんな形をして、どんな動きをしていたのかななどを教えてくれた。
- ・友達とどんな風に、どんな虫を探したのか興奮気味に話していた。
- ・「モリアオガエルの卵を見た！」と言って、絵に描いて説明してくれた。
- ・「シャクトリムシの赤ちゃんはこうやって歩くよ！」と言って、親指と人差し指で歩く様子を表現してくれた。
- ・「カエルの卵がフワフワした白い中に入っていた！」と話してくれた。
- ・生き物とのふれあいをとても喜んで、家に戻ってからカエルを触った話を何度も聞かせてくれた。
- ・一言めは「楽しかった、また行きたい」で、おたまじゃくしやイモリ、ちょうちょなど自分で触れたことなどがとてもうれしかったようです。発見がいっぱいの様子でした。
- ・ちょっぴり臆病なところがあるが、今までにほとんど見たこともない生き物にほんの少しでも触れられうれしかったようだ。
- ・おたまじゃくしが印象的だったようで「おたまじゃくしってね、ほっぺがあるんやよー」とか色々教えてくれ、その夜は画用紙におたまじゃくしの絵を描いてくれました。
- ・とのさまガエルを自分でつかまえたらベタベタして気持ちが悪かったとか、おたまじゃくしもいて手や足が出ているいろんな形のがいて、ぴよんと跳ねておもしろかったと言っていました。
- ・見つけたカエルの大きさを手で表したり、自分が水につかった高さを表したりしていました。
- ・手が泥だらけになったけど、カエルやおたまじゃくしがいっぱいいてすごく楽しかったと話していました。
- ・「ナメクジやチョウチョウを見つけた！」と言っていた。
- ・虫の名前を知ったことが嬉しくて自慢したいのか、「今日発見した虫は何でしょうか!？」と問題を出してきた。
- ・「シャクトリムシはひらがなの“ひ”みたいに見えた！」と言っていた。
- ・先生かお友達がカエルの卵を見つけたようで、順番を待って「見せて」と言ったけれど、なかなか見せてもらえず、移動する時間がきて結局見れなかったという話であった。
- ・虫を見つけたことや、お友達のお父さんと一緒に遊んだことが楽しかったと言っていた。

3.お子さんの話を聞いて、どのように思われましたか。

- ・どんな場所に特徴のないいきものが住んでいるのか、熟知している方に連れて行ってもらい、説明してもらえるため大変意味があることと思う。
- ・興味を持って自然を楽しむことがとても大切だと思う。

- ・森や虫は苦手なため、「大丈夫かな…」と思ったが、「楽しかった」という感想が聞けてうれしかった。
- ・家の周りなど普段の生活では味わえない経験をさせてもらったと思い、嬉しく思った。
- ・昨年とは体験の内容がどれくらい違うかわからないが、いきものを細かく見るようになった気がする。
- ・たくさんいきものを見て勉強し、成長したなと思った。
- ・じっくり観察していて、さらにその説明の仕方や表現の仕方が上手だなと感じた。
- ・先生の説明を良く聞きくなど集中力を発揮し、夢中になるのは本当に楽しんでおり、また坂本先生も上手に子供たちの興味を引き出してくれているのだと感じる。
- ・図鑑で見ると、実際に見て触れるということは印象に残りやすく、興味を持つため良いと思う。
- ・実際にいきものを見た後で、図鑑やテレビ等で同じものを見ると「あ、あのいきものと同じだ〜」ということになり、繋がりがもてて良いと思う。
- ・私が虫嫌いなため、親が連れて行くと「汚い、危ない」と言って虫などを触らせないため、今回は非常に貴重な体験だし、子供も楽しんでいただろうなと思った。
- ・自然の動植物に親しみを持ってもらえるといいなと思う。
- ・いきものに関心を持ってほしいと思っていたため、嬉しく思った。
- ・楽しそうだな、家族みんなで行ってみたいと思った。
- ・自分の幼い頃には、こういった環境を求めなくて普通にあったもので、こういった活動に参加させていただき、ありがたい反面、寂しくも感じてしまいました。
- ・話をする時の目の輝き、興奮した口調などから子どもは自然の中にいることが、自然で生かされ満たされるのだ感じました。
- ・とても楽しかったんだな〜と思いました。思う存分遊んで、この辺りでは絶対できないことを体験させていただきました。
- ・危ないから今まで水辺には行かなかったのですが、とても楽しそうなので、これからは行かせてあげたいです。
- ・普段、近くでは見れないものが実際に目にしてよかったと思います。
- ・普段、自然にほとんど関わりありませんが、子供はすぐに溶け込める力を持っているんだと思いました。
- ・おたまじゃくしやイモリを怖がらずに触れたことが「すごい」と思いました。また、顔も手も真っ黒で帰ってきて、「汚いから嫌」ということもなかったのが頼もしくかった。
- ・楽しそうであった。
- ・「触っちゃダメ！」とつい言うてしまうが、毒がない虫などは触らせて見守ることも大切だなと思った。
- ・もう少し、ゆっくり見れる時間があるとよかったのかなと思った。
- ・心も体も育つため、自然はいいなあと思う。

4.お子さんは身近な自然に触れること(庭でダンゴ虫と遊ぶ、庭の草取りを家族とするなど)が増えましたか。

ハイ…36 イイエ…7

5.「ハイ」とお答えの方、具体的にどのようなことですか。

- ・水の中のいきものへの興味が深まり、池や用水の中で遊ぶ中でいきものを探すようになった。
- ・家の近くの川の魚や虫も、もともと好きであったがますます好きになり、外で遊ぶ事を楽しみにしている。

- ・“いきものみつけ”を通して、今までやっていた家庭ゲームも「やりたい！」と言わなくなった。
- ・ツツジの蜜を吸ったり、ダンゴ虫を虫かごに入れて動きを観察するようになった。
- ・玄関先でナメクジを見つけ、触ってみたいけれど触れず…を数分繰り返し、ツツと触って「さわれたー！」と喜ぶなど、いろんな虫に興味を示すようになった。
- ・畑の水やりをする際に、ダンゴ虫を必ずつかまえるようになった。
- ・外に出るとすぐ、庭木や草の繁っている所に行きしやがみこむようになった。
- ・外に出るとすぐ土に触れていきものを探し、見つけると捕まえて持ってくるようになった。
- ・遊びに出かける時は、虫目的で公園に行ったり、夏は虫かごと虫取り網を持っていくようになった。
- ・現在、家でオタマジャクシとオジギソウを育てている。
- ・家の周りで赤ちゃんヤモリを見つけて観察していた。
- ・ダンゴ虫などメジャーな虫は触れるが、珍しい虫や少し大きな虫に興味は持つが「かまれるかな？」などと慎重にしている。
- ・ホタルを見に行った際、そーっと手を伸ばしてホタルをつかまえ、匂いを嗅ぎ「ホタルの匂いがする～」と言っていた。
- ・「いきものみつけしょ〜つと！」と言って、植木の根元のジメジメしている所を良く見て、パパッと土を掻いてダンゴ虫を見ている。
- ・公園に行っても、遊具で遊ぶより虫を探したり、変わった葉っぱを探したりするようになった。
- ・家にいるメダカやタニシを毎日観察している。
- ・祖父と一緒に、家に住みついているカエルを探している。
- ・園庭のカラスノエンドウで草笛を吹いたり、花摘みをしたりとても楽しそうに植物に触れている。
- ・バッタやダンゴ虫をつかまえて遊ぶが、必ず逃がしている。
- ・畑で野菜の収穫をお手伝いしてくれるようになった。
- ・祖母の家では、毎年夏に鈴虫を育てているため、そのお世話をときどき手伝っている。
- ・実家が山沿いで、ザリガニやとんぼなどを捕まえたり、川の水で洗い物をしたり楽しそうにしている。

6. 保育園の保育活動の中でこのような自然体験を取り入れることについてどう思いますか。

- ・自然と触れ合うことで、生物の多様性や自然の大切さ、環境を保護すること、命を大切にすることを幼いながらも学べるため、大人になる過程では重要なことだと思う。
- ・昨年の活動が子供にとって良かったと思っているため、今年もできることが嬉しく、“いきものみつけ”から子供が帰ってきて話を聞くのが楽しみである。
- ・本当は虫が苦手なのだが、喜んで虫をつかまえる保育園のお友達の姿に影響されているため、大好きな先生やお友達と自然体験をさせてもらうことができ、とても有難い。
- ・本当はこのような活動を家庭でしなければならないと思っているがなかなかできず、保育園で色々な経験をさせてもらい本当に助かっている。
- ・家での外遊びは、親や祖父母の経験遊びになり偏ってしまうため、いろいろな自然との触れ合い方を知ることが出来るため、良いと思う。
- ・家族で行くものとは違い、きちんと行動できるため良い。
- ・街中に住んでいると自然に触れることは少ないため、保育園の活動として自然体験をさせてくれるこの園に入園して、虫や池の中のいきものが好きになった。

- ・頭で色々と理屈で考えるようになる前の時期だから、体験しながら学んでほしいと思う。
- ・親と1対1で体験することもよいが、保育園のお友達と大勢で体験して話すことで広がりを持つ、話題を共有できて楽しさも2倍になると思う。
- ・親がいると汚れることや危険なことは「やめなさい!」と言ってしまいがちなため、保育園でこのような体験をさせてもらえるのはとても貴重なことである。
- ・自然に興味を持つきっかけになり、とても良い活動だと思う。
- ・大人が「虫などのいきものをは怖くないよ」ということを教えてあげないとダメだとは感じているが、私は虫が苦手な努力もしているが、保育園で頑張ってくれると嬉しい。

7.その他、ご意見があればお書きください。

- ・難しいかもしれないが、合宿形式(親子で参加)にして夜間や早朝の活動もしてみたい。
- ・昨年の川遊びにも親子で参加し、今年も親子で参加できればと思う。
- ・普段の生活において、家や畑、公園などで自然に触れる機会をできるだけ多くとっているが、子供にとって“いきものみつけ”はそれとは違う特別な楽しみになっている。
- ・いきものが苦手な子も、一緒に楽しめる内容ならいいな
- ・駅前に住んでいるとつい買い物に行ってしまうがちであるが、柴田神社の公園や近くの公園など自然もたくさんあるため利用すべきだと思う。
- ・土の匂い、感触、風などは記憶に残り、大人になった時、その環境を大切にしてくれることと思います。そして自分の子供にもつなげていきたいと思うのではないのでしょうか。
- ・普段、自然に触れることが少ないため、生き物を怖がってしまいどうしても人間社会を中心にものを考えるようになってしまうのではと思うことがあります。体験して自然の大きさ大切さを少しでも感じられるといいなと思います。

【保護者アンケート最終回からの考察】

終わった後の自宅に戻ってからの家族の会話から、子どもたちの毎日の生活の中に「いきものみつけ」が十分に入り込むと同時に、多様な価値観を柔軟に受け入れることのできるこの年代に、自分以外の存在(動植物)を受け入れていることが分かりました。また、たくさんの言葉や表情で伝えようとする姿にも、十分な自然とのコミュニケーションが感情や言葉などを育むいい機会になっていることを多くの方が実感しているようです。

アンケートの中に次のような言葉が印象に残っています。～自然と触れ合うことで、生物の多様性や自然の大切さ、環境を保護すること、命を大切にすることを幼いながらも学べるため、大人になる過程では重要なことだと思う。～土の匂い、感触、風などは記憶に残り、大人になった時、その環境を大切にしてくれることと思います。そして自分の子供にもつなげていきたいと思うのではないのでしょうか。～このような意見から、今回の事業が保護者の方々にとって、「自然・環境・生き物・暮らし」を意識するいい機会になったといえます。

いきものみつけ活動保護者アンケート 年度最終回終了後

1.今回(3月14日)の自然体験活動について、帰宅後、お子さんはどんなお話をされましたか。

- ・「ウサギのうんちを見つけた！」と話してくれた。
- ・「すごく楽しかった！」と言っていた。
- ・「ウサギのうんちを見つけた！」という言葉が一番印象に残ったようである。
- ・「雪道は歩きにくいし、すべるんよ～」とすべり台も喜んでいました。
- ・「うさぎやリスが食べ物を集めて置いておく場所が雪の中にあったよ！」
- ・ウサギのおしっこが赤いことを教えてくれた。
- ・家や保育園の周りには雪がないのに、ハックルベリーの森には自分が隠れてしまうほどの雪が積もっていることを驚きながら教えてくれた。
- ・雪が深くて歩きにくかったことを話していた。
- ・「女王バチが眠っていたよ！」と興奮して話してくれた。
- ・「ツララを食べたんだよ！」
- ・「すごく足が疲れたけど、山の中をたくさん歩いて楽しかったよ～」
- ・「キレイな雪とツララはおいしかったよ～」
- ・動物が現れないかワクワクしたことを伝えてくれた。
- ・興奮するというよりは慣れた様子でハックルベリーでの体験を話してくれた。
- ・きつつきの巣を見つけたことを身振り、手振りでも興奮気味に話していた。
- ・「いきものみつけ終わってさみしいなあ」と言っていた。
- ・「虫がいそうな穴を見つけてのぞいてみたけど、暗いしちっちゃくてよく見えなかった」と話してくれた。
- ・冬ならではのいきもの様子が見れたことを話してくれた。

2.お子さんの話を聞いて、どう思われましたか。

- ・行く前は「いきもの見つけられるかな？」と聞いたら「いないと思う」と答えていたのでウサギのうんちを見つけて子供ながらに何か感じるものがあったのではないかと思った。
- ・家だとなかなかできない事などもできて、子供がとても生き生きしているなと思った。
- ・自分たちでは連れていけず、知識もないためとてもいい経験をしたのだなと思った。
- ・家でうさぎの図鑑を見ていた。
- ・今まで、いきものや動物は冬の間どのように過ごすかわからなかっただろうが、実際に体験したことで学べたのではないかと思う。
- ・雪の山の中に入りいきもの様子を観察したことで、厳しい自然の中でいきものがどんな工夫をして生きていくのか、自分の中に鮮明に印象として残ったと思う。
- ・いきものみつけの活動があること、参加できることをとてもありがたいと思った。
- ・日常とは違う環境で五感を刺激されたこと、自然にたくさん触れることができたことを嬉しく思う。
- ・自然の中で、心も体もパアッと開放的になり良かったなと思った。
- ・環境の違う所に行くことにより、いつも自分が暮らす所だけが全てではないことが、頭で分かるだけでなく体で感じたのではないか。
- ・私たちの小さい頃と比べると空き地なども減り普段の生活の中で自然に触れ合うことも少なくなりなかなか体験することのできないことが体験できた。

- ・大好きな保育園のお友達と色々な体験ができ本人も喜んでいて、その姿を見るのが私たちも嬉しく感じる。
- ・何もかも初めての昨年度とは違い、わが子なりの楽しみ方をすでに見つけているなと思った。
- ・キツツキの巣は私も見たことがないし、貴重な体験が出来たのだなと思った。
- ・自分なりに虫がいそうな所を探し回ってみたのだろうと思ったが、どうやら思ったようには見付からなかった様である。
- ・私たち親子だけではできない貴重な体験をしてきたことを、嬉しく感じた。
- ・実践することは印象も強く、きっと大きくなっても覚えてくれると思う。
- ・自然の中で十分に遊ぶ日はどれくらいあるだろうかと考えた際に、そんな中での経験はとても大切なものだと思うし、来年度もぜひ続けてほしいと感じた。

3.春からの自然体験によって、生きものに興味や関心を持つなど、お子さんに変化はありましたか。

・はい…33 いいえ…4

4.「はい」とお答えの方、具体的にどのような変化がありましたか。

- ・虫などについて学んできたことを話してくれるようになった。
- ・家の近くや本などで、知らないいきものがあると調べたりするようになり、命の大切さも分かったのではないと思った。
- ・足羽山へ家族で行ったとき、「この葉っぱは～」と話してくれ、植物について全く興味がないようであったが変化してきた。
- ・見つけたいきものを帰ってから図鑑やインターネットで調べたり、私たちにいろいろな疑問を聞いてくるといった知的好奇心が高まった。
- ・絵を描いたり、工作で虫などをリアルに作るようになった。
- ・積極的に図鑑を読むようになった。
- ・虫は怖いという気持ちが先に出てしまい触れることはないが、本や絵を見て名前を教えてくれた。
- ・川でとってきたメダカを水槽で飼い、毎日餌をあげ「おはよう！」の挨拶をするなどいきものに興味を持っている。
- ・知らないものには触らなかつた子が、自ら見に行き、触り、感じるといった変化があった。
- ・1週間に1回は田舎の方に行き自然との触れ合っているが、“保育園のお友達と一緒に”というのが本人にとってはさらに楽しみが増えているようである。
- ・園でも知らないいきものについて図鑑で調べるなどいきものに対する関心度があがった。
- ・元々虫が好きだが、いきものみつけに参加してから図鑑で虫を見たり、名前を調べるが増えた。
- ・湿った土で石や、転がっている木の下を「こういう所にダンゴ虫がいるんだよ～」と言いながら見つけるようになった。
- ・見た目では気持ち悪い虫、ちょっと怖い虫が先生の話聞いて、触ることが出来るようになった。

5.「自然との接し方」について、お子さんの反応に接して、ご家族の方では、変化はあったと思いますか。

・はい…33 いいえ…7

6.「はい」とお答えの方、具体的にどのような変化がありましたか。

- ・私自身は虫が苦手だが、子供が興味を持って虫を触ったり、近くに持って来たりした時は、嫌がらずに相手をするようにしている。
- ・家の近くの自然にも、前から興味はあったが、調べたり、綺麗だなという感情が増えた。
- ・子供と一緒に図鑑を見るようになった。
- ・子供と自然体験できる場所に行き、自分たちなりに観察する機会が増えたように思う。
- ・虫が嫌いであったが、子供とともに観察するうちに少し興味が出てきた。
- ・話を聞いたり報告を受けたりしたことで、自然の素晴らしさや関わることの大切さを実感し、家族の休日の過ごし方としてそういうところに出かけるようになった。
- ・一緒に本を読んだり、公園に出掛けたりした。
- ・今までは公園にでかけて遊ぶ程度であったが、遊具のない自然へ出かけることが何度かある。
- ・より活動的になったと思う。
- ・公園に行ったりした時に「坂もっちゃんに教えてもらった～」と草の名前や虫の名前を教えてくれる。
- ・いきものや自然を通して、少しではあるが四季を感じ取れるようになったと思う。
- ・今までは、山の中などは虫などが多し、危ないからと敬遠していたが身近なところにも自然はあるのだと思い、公園や足羽山に行くことが増えた。
- ・子供が虫を触っていても「汚い」と言わず、見守れるようになった。
- ・植物をベランダで育てた時には「お天気とお水でパワーをもらって元気に育つ」と言って水やり等を手伝ってくれ、その成長ぶりもいろんな言葉で表現していた。
- ・家族で公園に行ったときに、乗り物に乗って遊ぶだけでなく、いきものや植物などの自然にも触れようと思うようになった。

7.今後、「自然とのふれあい」をどのようにしていきたいですか。

- ・無理のない程度で、なるべく自然があるところで遊ばせる機会を持たせたいと思う。
- ・昔と違い、自然とのふれあい、自然と遊ぶ事が少なくなった今、この活動で自然とのふれあいの楽しさをわかった子供たちを見て、家族でももっと触れ合う機会を増やしたい。
- ・もっと外へ出かけたいなと思った。
- ・なるべく幼いうちに自然に触れ合う機会を持つようにしていきたい。
- ・季節の変化でいきものはどのように過ごすのか、引き続き子供とともに体験していきたいと思う。
- ・自然を大切に、できるだけたくさん感じさせ、将来環境問題を考えるようになったときに生かされると思う。
- ・季節を肌で、目で感じていきたい。
- ・天気の良いときは基本外で遊ぶ、道具に頼らず自然のもので遊ぶ、しかし家に入って休憩をとり手を洗うということには気を付けていきたい。
- ・新1年生になり勉強も始まるが、できるだけ自然との触れ合いをさせていきたいと思う。
- ・地域性(特に福井、住んでいる付近など)を感じられるようになってほしい。
- ・子供たちが興味のあることは、なるべく見守りながら接していきたいと思う。
- ・体験には参加させたいし、家でも気候の良いときには植物を育てたりしたい。
- ・今後も自然とのふれあいを大切にしていきたいが、家族で山に行ったり森に入ったりはなかなか出来

ないため、坂本先生のように案内して下さる方がいると助かる。

・これからも“いきものみつけ”のような機会を与えていただけると嬉しい。

8.その他、ご意見があればお書きください。

・今後も、ぜひこの活動を続けていただきたい。

・本当に良い経験が出来たと思う。

・1年と限らず、ずっとこの活動を続けていってほしい。

・「いきものみつけ」を通して子供が得たことは、子供の成長の糧となり、今後の成長の上で自然やいきものや命の大切さをきちんと考えられるようになって信じている。

・魚釣りなどもしてみると良いと思う。

・来年度も自然体験活動をお願いしたい。

・小学校でもこのような活動があるととても嬉しく思う。

・家では体験させてあげられないことをたくさんしていただき、感謝している。

・毎回、いきものみつけを楽しみにしていたため、たくさんの子供たちも体験できるよう活動していただきたいと思います。

・同じ年のお友達と同じ体験をし、発見するという楽しみや喜びは大きかったと思う。

・なかなか家庭で自然体験というのは難しいため、身近でできる子供が関心を持ちやすい体験の方法があれば教えていただきたい。

【保護者アンケート最終回からの考察】

体験活動終了後の自宅に戻ってからの家族の会話から、子どもたちの毎日の生活の中に「いきものみつけ」が十分に入り込むと同時に、多様な価値観を柔軟に受け入れることのできるこの年代に、自分以外の存在(動植物)を受け入れていることが分かりました。また、たくさん言葉や表情で伝えようとする姿にも、十分な自然とのコミュニケーションが感情や言葉などを育むいい機会になっていることを多くの方が実感しているようです。

アンケートの中に次のような言葉が印象に残っています。

～自然と触れ合うことで、生物の多様性や自然の大切さ、環境を保護すること、命を大切にすることを幼いながらも学べるため、大人になる過程では重要なことだと思う。～土の匂い、感触、風などは記憶に残り、大人になった時、その環境を大切にしてくれることと思います。そして自分の子供にもつなげていきたいと思うのではないのでしょうか。～このような意見から、今回の事業が保護者の方々にとって、「自然・環境・生き物・暮らし」を意識するいい機会になったといえます

VIまとめ～自然を通したコミュニケーションにおける意識変化について～

1. 大きな目標(ESD)は達成できたか？

四季折々のフィールドでの体験活動から、子どもたちとともに保護者や保育士さんも生き物の多様さに気付いたことが活動やふりかえり(アンケート含む)から理解できます。また、園内での限られた空間での保育と異なり自然豊かな場所での活動によって、多種多様な関わりが生まれ、普段の保育では確認できない個々の成長や不足している関わりが、保育士さんのアンケートより明確になっていることも特筆すべきことです。

また、たくさんの生き物に触れることにより、同じ生命体としての「いきもの」に対しての命や大切に感じる気持ちが十分子どもたちには理解できたようです。保護者も子どもたちからの話で積極的に自然との関わりを持つという気持ちが年度当初よりも終了後にはハッキリと意識化されていることも大きな成果でした。

個人的には、「生命の多様さ」に気づき触れあうことが、豊かな人格形成に大きな影響力を持っていると信じています。私たちの社会が、多様な生命集団であることを心から理解することは容易ではありませんが、今回の一連の事業及びそれらの「ふりかえり」や「アンケート」から「若い年代」は柔軟に吸収できる存在であることが分かったことが大きな成果です。多様な社会を受容することはESDの大きな教育のひとつ。その土壌を幼児期における自然とのコミュニケーションはいともたやすく創り上げることにとてもビックリしました。

2. 具体的な子どもたちの変化について

普段生き物との触れ合いがとても少ない子どもたちである。街中の保育園ということもあって保護者の方々も生き物との触れ合いを積極的に持つ環境にはありません。子どもたちは、いきなりの山の中の田んぼや壁のない風景もさることながら、無数のオタマジャクシやニホンアマガエルにびっくりしたのではないのでしょうか？年長の子どもたちの中にも、触れないし触ろうとしない子どもたちが多くいたことが強く印象に残っています。

まず、捕まえるところから自分たちで関わらせ、その後で捕まえたものをケースに入れるまでを成長に声かけすることで全員ではないが約80%の子どもたちが触れるようになりました。触れるとともに行動半径が少しずつ拡大していったのも印象に残っています。横を流れる小川に入って網を入れ始めたり、協力して魚を追ってみたり、それまではなにをするにしても「〇〇していい？」と聞いていた子どもたちが、自分の意思で行動し始めるようになると、回が進むごとに、自分たちで探して触れるという行為は普通に行われるようになり、非日常を日常として受け入れていったともいえます。

- ①生き物に興味を持つようになり触れることができるようになった
- ②自分の意思でいろんな自然フィールドで行動できるようになった
- ③場所によって生息している生き物が異なることが分かった
- ④外に出て遊ぶことの楽しさを理解し、家庭においても外に出ていくようになった

以上、子どもたちの大きな変化ともいえます。

3. 自然の中で遊ぶ

行動半径も含めて身体の動きがダイナミックになっていったように思う。小川に入り畦を歩き崖を登り山道を歩き雪の中を歩いて多くの生き物を探し回ったことで、「遊ぶ=いきものを探す」ことが身

について思う。環境教育の流れの中で言われる「in ⇒ about ⇒ for」でいうところの「in」の部分について、十分とは言えないが少なからずの影響を与えたことがと思われます。自然の中で遊ぶ！は遊んでもらうことではなく、主体的に空間を受け止めて場所を創り、仲間と一緒に遊びを作り始めることだと理解しています。自然の中で遊ぶ体験や時間は、環境や自然の問題・課題を自分の事として受け止め捉えて、ESDを進めていく上では欠かせないのではないのでしょうか？

4. 保育士の変化について

現代社会の中では、自然体験だけが子どもたちの人格形成に役立つかというのでしょうか？それはあり得ないことです。子どもたちの置かれている諸々の課題を乗り越えるには、常に身近にいる保育士さんや保護者の関わりがどうしても外せません。

今回は、保育園の園長先生や保育士さんの力が大きかったというのが、プラスの効果を生んだともいえます。①自然フィールドの変化に富んだ空間をコツコツと学びとる姿勢 ②子どもたちが安全に行動できるようにドッシリと構えた位置どり ③自分自身も愉しみたいという気持ちの表出 普段の保育の業務を自然の中で実践していたことに強く感銘を受けました。その関わりがあったからこそ子どもたちの変化ともいえます。

普段の保育へと繋げる技術や活かすことをしている点にとっても共感を覚えました。全体的に子どもたちを「見守る」姿勢や保育士さんの活動中の位置などがスムーズになっていると思われて、自然の中だからといって特殊な配慮や準備や言い聞かせ(特に安全について)がとても少なく、普段の保育の一環として関わっているようなとても自然な活動になっていることが、今後も一緒に進めていきたいという私自身の気持ちが生まれたのを覚えています。

5. 保護者の変化について

保護者自身の変化についてもアンケートからですが、感心させられる回答がとても多かったです。子どもたちが活動後に帰宅してから話す内容に、保護者自身が喜びを感じ、その場に一緒にいたかった！という意見があったり、お手伝いをしたい！という積極的な姿勢も見られたことです。翌年には何名かの保護者が補助スタッフとして入ってきました。

子どもたちの毎日の生活の中に「いきものみつけ」が十分に入り込むと同時に、多様な価値観を柔軟に受け入れることのできるこの年代に、自分以外の存在(動植物)を受け入れていることが分かりました。また、たくさんの言葉や表情で伝えようとする姿にも、十分な自然とのコミュニケーションが感情や言葉などを育むいい機会になっていることを多くの方が実感しているようです。

アンケートの中の次のような言葉が印象に残っています。

～自然と触れ合うことで、生物の多様性や自然の大切さ、環境を保護すること、命を大切にすることを幼いながらも学べるため、大人になる過程では重要なことだと思う。

～土の匂い、感触、風などは記憶に残り、大人になった時、その環境を大切にしてくれることと思います。そして自分の子供にもつなげていきたいと思うのではないのでしょうか。～

このような意見から、今回の事業が保護者の方々にとって、「自然・環境・生き物・暮らし」を意識するいい機会になったといえます。さらに、休日についても今までとは違う過ごし方をしようという

意見も出てます。どちらかというと、保育園に預けているということもあり、自然体験活動もしていただけで嬉しい！という気持ちを持つ方が多いようだが、一緒に楽しもうという気持ちに変化している方も多数いることがアンケート結果から推測されます。安全や活動場所のこともあって、自身で連れていくことはできないが、自然体験をしている場に、親子で参加したい！という言葉がたくさんの方からいただきました。

また、保護者会で事業を計画して親子で楽しもうという機会も増えて毎年のように私たちは保育園の活動とは別途で受け入れをしています。

生き物に対する愛おしさ、自然の中で過ごすことの楽しさや安心感、子どもたちの活動後の表情を観るたびに、保護者たちも少しずつ入り込んでいるのではないかと信じています。今後も、子どもたちが園から帰宅して、湧き出でる泉のように自分の体験した事を保護者の方に話す場面をイメージして活動を共に進めていければと思います。私自身も子どもの保護者であることなので、これからも一緒に楽しみたいですね。

5. 実施スタッフの紹介



坂本 均 1959年11月10日生まれ(53歳)

九州・大分県出身。児童福祉に14年ほど携わる。縁あって福井県・勝山市に移住して今年で16年。1999年にノーム自然環境教育事務所を設立。大野の森に触れて、自然・環境教育の道を突き進む。現在は、ハックルベリーの森を中心に家族・一般・教育団体向けの体験講座や地域資源を活かしたエコ・グリーンツーリズム、農業・自然体験のワークステイ事業にも受け入れに取り組んでいます。

体験活動事業主体	特定非営利活動法人エコプランふくい
体験活動運営者	ノーム自然環境教育事務所代表 坂本 均
体験活動実施年度	H21年度／H22年度／H23年度 計三回
体験活動実施保育園	福井市三谷館保育園

